

「出る杭」を育てる

失われた10年と言われる中、大学にある知的資産の産業への移行推進にむけた種々の施策がとられている。「産学官」だという。従来型の日本の産業は冷戦構造と日米安保の枠組みで成長し「政産官の鉄のトライアングル」、「ジャパンアズナンバーワン」などといわれ、「学」などどこにも出てこなかった。ずいぶんな変わり様である。情報通信技術、コンピュータ、インターネット等のインフラの提供などの背景から Apple, Silicon Graphics, WWW, Netscape, Yahoo, Microsoft といった新しい企業が80 - 90年代に現れ、世界の様相をすっかり変えてしまった。一方、生命科学の遺伝子、分子レベルへの急速な進歩、ヒト遺伝子の塩基配列解読もDNAの二重らせん構造の発見（1953年）から50年で達成されている。基礎研究の進歩のみならず、コンピュータ演算能力向上、分析技術のマイクロ化と自動化があったからこそである。そしてITは多くの若者の「ひらめき」とそれを見抜く投資家と1 - 2年での開発戦略にほぼすべてがかかっている。決断とスピードで勝負がきまる。これと違ってバイオ分野では「シーズ」のほとんどは大学にある。研究成果には長い時間と実績が必要だからである。しかも、新薬等の市場への可能性は限りなく小さく、10 - 15年と長く、リスクとコストが大きい。いわゆる「死の谷」であり、バイオでもっとも成功した Amgen でさえも、会社設立から10年の時間と数百億円の投資を受けてようやく製品が市場に出たのである。この商品の市場が、そのとき、そこにあったのである。ITベンチャーには「死の

谷」はない。目利きと開発への決断と投資。勝負は1 - 2年。普通の企業でいつでもしていることである。勘違いしてもらってはこまる。

大学発ベンチャーは大丈夫か

ところで「大学発ベンチャー」推進といつて500社程度ができたという。結構なことである。しかし、間違ってもらっては困る。大学は教育がその使命、またなんの役に立つかわからない科学研究をする唯一の場所である。科学は自然の法則を探り、自然を理解したいという人間の営みであって、その成果が役に立つというためではない。しかし、結果として人間の自然への理解が進むのである。万有引力の発見、素粒子の発見、相対性原理の発見等、これらの知識の積み重ねが後々に役に立つのである。大学は知の創造の場であり、自然の探求の場である。もちろん工学、医学系は多くは現実の社会的問題を抱え、問題を意識しているからこそ、研究の目標はより具

くろ かわ
黒 川

きよし
清

日本学術会議会長
東海大学教授

巻頭言

体的であることが多い。そこから社会へのスムーズな橋渡しをしようというのが、本来の「ベンチャー」の目的である。大学と社会の間の風通しをよくするのは結構なことである。当たり前のお話である。従来は、偏差値の高い大学に入れば大企業は喜んで採用してくれたし、また大学での猛勉強などは要求してこなかった。会社で鍛えるからねと。また大企業志向で安定、リスク回避、上司の言うことを聞く素直な人材が求められていたのではないが、「企業」志向ではあっても決して「起業」など考えもしなかったし、教えもしなかった。「起業」などという価値観は若者に対して奨励もされてこなかった。社会の価値観も産業も雇用も年金も税制も金融も、すべてが「ベンチャー」を奨励しない方向できたのだから、「ベンチャー」が起こりにくいは当然である。「大学発ベンチャー」500社といっても多くは成功しないのである。昔から言っていたではないか、「七転び八起き」と。これが本来の姿なのである。「大学発ベン

チャー」がどれだけ生き残れるか。税制でまずくところも結構出るだろう。

「出る杭」を応援しよう

日本でもベンチャーはある。当然「反体制」である。ただ、日本では「保守派」「体制派」から常にいじめられ、苦労は多い。なにくその「反骨精神」である。クロネコヤマト、京セラ、ソフトバンク等々であり、すっかり世の中を変えた。情報が国際的な広がりでも共有される時代、ベンチャーは「出る杭」である。「高い志」と「燃える炎」を持っているのである。野茂であり、ナカタである。そのあとを少しずつ、そろそろとあとをついてくる人たちが出てくる。野茂から9年経って初めて「松井」がメジャーに登場すると、日本では毎日の報道が「松井、イチロー」なのである。「イチロー、松井」ではないのである。なぜか。9年経ってようやく「本家の長男」が広い世界に出かけたので心配でしようがないのである。日本中が「過保護ママ」の心境なのである。こんなことではベンチャーなどはおぼつかない。「出る杭」を見つけ、温かい目で見守る。他流試合に出かける志の高い燃える若者にこそ日本を変える将来がある。今の日本は明治維新10-15年前の徳川幕府と同じ状況ではないのか。大老、御家老たちは何も決められずに先送りしているうちに日本を囲む周りが変わり、明治維新になる。そして旧体制派は退き、志の高い燃える若者たちが大活躍する。そして世の中が変わる。歴史は繰り返すのである。

プロフィール

昭和42年3月 東京大学大学院医学研究科修了。

(専門)内科学、医学博士。

昭和44年7月 University of Pennsylvania 医学部生化学助手、昭和46年7月 University of

California at Los Angeles (UCLA) 医学部

内科上級研究員、昭和49年10月 University of

Southern California 医学部内科準教授、昭和

52年7月 UCLA 医学部内科準教授、昭和54年

7月 UCLA 医学部内科教授、昭和58年10月

東京大学医学部第四内科学教室助教授、平成元年

4月 東京大学医学部第一内科学教室教授、平成

8年7月 東海大学教授、医学部長(～平成14年)、

平成9年4月 東京大学名誉教授、平成14年4月

東海大学教授、総合医学研究所長(～現在)

(日本学術会議会員歴)第17・18期会員